

東日本大震災 遠野市による被災地支援の記録

2011年東日本大震災から1年を迎えて



震災から11時間後の2011年3月12日午前1時40分、遠野市の災害対策本部に、「大槌高校に500人が避難している。水も食料も何もない。助けてほしい。」と男性が救援を求めて飛び込んできた。

ラジオの情報しかない時に、被災地から被害の甚大さを知らせる最初の情報であった。

職員は、直ちに、水・食料・毛布などをかき集めて車に積み込み、大槌へと向かった。



仙台市の東130kmを震源とする大地震は、東日本一帯に甚大な被害を与え、そのあと襲来した津波により東北から南北海道に及ぶ沿岸地域は壊滅的な打撃に見舞われた。死者15,000人以上、行方不明者が3,000人を超える未曾有の大災害。

遠野市では、震災前から地域防災計画を策定し、災害対応に備えていた。また、後方支援拠点構想を沿岸自治体と協議し訓練も行い、有事の対応に備えていた。



遠野市の災害対策本部内では、市内の被害状況報告や次々と寄せられる被災地情報への対応に職員が奮闘。

一時、市内が二日間停電となり、電話も通じず情報収集・伝達に困難を窮めるも、従事したスタッフは疲れよりも使命感に燃え、昼夜を問わず業務を遂行した。



被災地や被災者の状況、行方不明者や負傷者の情報などを災害対策本部の掲示板に公開。様々な情報を掲示することで、支援活動に携わる職員やボランティアが情報を共有し、他の災害対策拠点との情報交換にも活用して、市民や被災者等から寄せられる家族・知人の安否確認などの問い合わせにも役立った。



市内の医師や医療スタッフが自主的に避難所を巡回し、負傷者や健康状態に問題がある被災者を診察、必要な手当てを行った。

医師や看護師の診察を受けながら話ができることで、多くの避難者が治療だけではなく精神的サポートを得ることができた。

災害対策の一環として、遠野市は、国内外から日々寄せられる支援物資を管理する物資センターを立ち上げた。

仕分け作業には市民ボランティアも協力、ここで仕分け分類した物資は、必要に応じて被災地へと届けられた。





ボランティアが食糧を準備するなど、婦人会も被災地支援に協力。

市民が持ち寄った米を使って用意された、14万個ものおにぎりを被災地に届けた。



発災後は、毎日、朝夕2回、市職員によるミーティングを持ち、最新の情報や活動内容を十分に共有することに務めた。それぞれの持ち場から寄せられる情報や報告の共有は、各支援部隊の任務調整に大変役立った。

遠野市災害対策本部の後方支援活動は、被災地はじめ各方面から賞賛を持って高く評価されている。